第3201号 （第三種郵便物認可）

「共同体」の生命力

ハンセン病療養所における人々の繋がりを鮮やかに描き出す一冊

坂田勝彦

青山陽子 著

▶病いの共同体

ハンセン病療養所における患者文化の生成と変容

11・13刊 A5判320頁 本体3600円

新曜社

国立ハンセン病療養所「多磨全生園」の周囲には、「柊の垣根」と呼ばれる生垣がある。それはかつて高くそびえ立ち、外界とその場所を隔てる壁として存在した。本書の表紙を飾る写真は、現在は低く刈り込まれたその垣根の一部を写したものである。雨水を滴らせながらも屹立する柊の葉の姿は、ハンセン病療養所という場所で人々が営んできた生の瑞々しさと、彼らがそこで生きてきたことの歴史的意味とを、読者に鋭く訴える。

1996年の「らい予防法」廃止や2001年の「ハンセン病違憲国家賠償請求訴訟」熊本地裁原告勝訴判決など、近年、ハンセン病問題を巡る状況は大きく変化した。そして、隔離政策の形成過程が歴史的に検証されるとともに、実際にその病いを生きてきた人々の多様な経験や主体性に着目する研究が蓄積されてきた。

10年以上に及ぶ著者の全生園でのフィールドワークをもとにした本書は、「療養所という場で営まれてきた患者たちの生活活動が、集団としての連帯を生み出し、文化を形成してきたプロセスを描き出す」（3頁）ことを目的としている。その作業は、これまでのハンセン病問題に関する社会学の研究成果に連なる仕事であるとともに、ハンセン病療養所という場所で人々がいかに生き、いかなる繋がりを構築してきたかをより深く探求する試みでもある。

本書は三部構成で、序章と終章を含めた13の章からなる。第一部「生活の語りからみる患者文化の諸相」では、療養所の開所以来、入所者が形成してきた相互扶助や統治の仕組み、患者自治会をはじめとする各種の生活組織の存在やその機能、様々な営みの意味が検討されている。第二部「患者集団の記憶の枠に寄り添い、離れつつ語る自己」では、療養所における夫婦生活の有様や子供を持った入所者の経験、ハンセン病療養所におけるマイノリティの問題などから、園内の文化と個人の意味世界との関係が考察されている。第三部「消えゆく患者集団の記憶の果てに」では、90年代以降に活発化した市民運動の展開や、近年浮上したハンセン病を巡る新たな歴史観について、それぞれ検討されている。

本書で特筆すべきはまず、ハンセン病療養所における人々の組織と文化に分析の単位を置くことで、彼らが築き上げてきた関係性の位相を描き出した点である。

ハンセン病療養所では戦前から、多様な生活組織が入所者によって作り上げられた。それは同郷の縁に基づく県人会や、信仰を共にする宗教団体、各種の趣味組織、園内生活の全般を運営した自治会まで多岐にわたる。また、貧しく不十分な生活環境のなか、彼らは生きるために様々な「作業」に行った。それらは、農耕や畜産、木工や土工、重病者の看護など、衣食住全般に及んだ。そして、「縁もゆかりもない他人同士」が「精神的にも安定した生活を送る」ことを模索する中で、「施設の補完」にとどまらない、同じ病いを生きる者同士の連帯が形成されてきた。入所者たちの組織や文化に照準し、その機能を問うことで、本書はハンセン病療養所の内的世界の構図を読者へ鮮やかに提示する。

そして本書の圧巻が、入所者による「看取り」の記述である（序章および第一部の第五章）。ハンセン病療養所ではかつて、重病者の看護から葬儀まで、入所者の手で行われた。それは、病いの苦しみや迫りくる死の恐怖を分かち合い、同じ境遇をともに生きてきた仲間の死を悼む営みであった。時代の変化とともに、ほとんどの「作業」が姿を消した。葬儀についても、著者が参列したある式の際、「もうこんなふうに立派なお葬式ができるのも限られてくるね」とその場を取り仕切った方がつぶやいたように（2頁）、年々、入所者の関わる部分は簡略化されつつある。しかし、人々が老い、次々と亡くなっていく中であっても、その場所で共に生きてきた仲間の傍らに寄り添い、死を弔うという共同の習慣が残り続けている事実は、かつて「生活」を基点に形成された「共同体」が、約一世紀を経た現在も確かに存在することを示している。

このように、本書はハンセン病問題を考える上で示唆に富む研究成果である。最後に、本書から評者が改めて考えさせられたことを述べたい。

ハンセン病療養所では戦後、治療環境や社会状況の変化を背景に、「障害」の区分や労働能力、エスニシティなど、様々な差異が生活格差として顕在化した。本書でも、ある「在日韓国人」の入所者のライフストーリーを検討した第二部第九章において、国民年金制度の制定に伴い園内で生じた「国籍」や「傷害」の程度などによる生活格差の問題が取り上げられている。こうした変化は当時、園内で大きな問題になっていた。本書はハンセン病療養所で形成された「共同体」に注目する視点を提示したが、今後の研究は、連帯や協同とともに、その「共同体」にいかなる亀裂や葛藤が生起してきたかについても、踏み込んで検討する必要があるだろう。

「あとがき」で記されているように、調査の開始から本書の出版に至るまでの間、著者は全生園に通う中で多くの出会いと別れを経験してきた。月日の経過は否応なく、ハンセン病療養所の有様を変えていく。だが、著者が時間をかけて育んできた本書の記述は、全生園で形成されてきた「共同体」と、それがその場所にあったことの歴史的な重みについて、時代をこえて読者に伝えていくはずだ。

（東日本国際大学准教授）